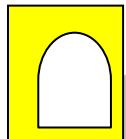


日吉台地下壕保存の会会報



第120号
日吉台地下壕保存の会

2015年度総会のお知らせ

今年は戦後70年の節目の年であり、私たち日本人がどちらの道を選択するのかの、大きな岐路に立っている年でもあります。マスコミは年初から第2次世界大戦に関する様々な特集を組み、関連本の出版も相次ぎ、一般の人びとの関心も高まっているように思われます。その関心の裏には、私たちの暮らす「今日」が、もしかしたら「戦後ではなく戦前」と呼ばれる状況になりはしないか、という不安もあるように感じられます。日吉台地下壕保存の会は、1989年4月に第1回総会を開催して以来、中断することなく活動を続け、日吉台地下壕の存在は徐々に知られるようになり、戦争遺跡という言葉も一般的になりました。

戦争体験者が人口の2割を切った今、語り残せる人、書き残せる人は、どんな些細な体験も残してほしいと思います。また現存する戦争に関わる遺構は、どんな些細な遺構も、保存し研究調査してその持つ意義を明確にすれば、人にかわって戦争の悲惨と愚かしさを伝える説得力を持つことが出来るのです。

26回目となる今年度の総会は、6月6日（土）に以下の通り開催いたします。記念講演は建築史がご専門の吉田鋼市（こういち）横浜国立大学名誉教授。氏は元神奈川県文化財保護審議会会长であり、横浜市文化財保護審議委員のひとりでもあります。誰でも参加できますので、どうぞ日吉キャンパスまでお運びください。

日 時 2015年6月6日（土）13:00～16:00

場 所 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

記念講演 13:00～14:45

演 題 「横浜の戦争遺跡—いくつかの実地検分からの報告—」

講 師 吉田 鋼市氏 横浜国立大学名誉教授（建築史）

元神奈川県文化財保護審議会会长・横浜市文化財保護審議会委員

『アール・デコの建築』（中公新書）『ヨコハマ建築慕情』（鹿島出版会）

総 会 15:00～16:00

- ・2014年度活動報告
- ・2014年度会計報告
- ・2014年度会計監査報告
- ・2015年度役員選出と承認
- ・2015年度活動方針の提案と承認
- ・2015年度予算の提案と承認

目 次	
卷頭言 総会のお知らせ(亀岡敦子)	1p
新聞記事 神奈川県立歴史博物館特別展	2p
報告 県博 図録記事の問題点について(山田譲)	3-5p
報告 県博の特別展と見学会(石橋星志)	5-6p
報告 通信兵、暗号兵立会い記(石橋星志)	6-7p
聞き取りメモ 元通信兵平田一郎さん(山田譲・淑子)	7-8p
手記 “日吉と私” 元通信兵平田一郎さん	8-10p
報告 地下壕入口、新たな破壊の可能性(石橋星志)	10-11p
報告 地域のチカラ「H26年度最終報告会」(小山信雄)	11p
連載 日吉第一校舎ノート(8) (阿久沢武史)	12-13p
報告 ガイド養成講座(喜田美登里・上野美代子)	14p
お知らせ 平和のための戦争展 in 横浜	15p
お知らせ 戦争遺跡保存全国シンポジウム開催予定	15p
計報 15p	
活動の記録 16p	

○神奈川県立歴史博物館 特別展 の新聞記事 (毎日新聞)

2015年(平成27年)2月26日(木)

神奈川 26

陸にあがった海軍
連合艦隊司令部
日吉地下壕からみた
太平洋戦争

国立歴史博物館

この地で、
日本海軍は、
世界を掌握する
力を持った。
（略）あがつた
海軍連合艦隊司令部
日吉地下壕からみた
太平洋戦争

（略）

（略

報告**県立歴史博物館特別展「陸にあがった海軍」****図録記事の問題点について**

運営委員 山田 譲

1月31日より3月22日まで神奈川県立歴史博物館で「陸（おか）にあがった海軍」と題して日吉台の海軍地下壕を中心とした特別展が開催されました。このような公的な博物館で近現代史の、それもアジア太平洋戦争にかかる特別展が企画開催されたことは、特筆すべきことだと思います。そして、私たちが精力的に保存と見学案内につとめている日吉台地下壕群に焦点をあてていることは、感慨深いものがあります。全国の戦争遺跡保存運動で努力されている全国ネットのみなさんにとっても励みになることだと思います。

しかし残念ながら、特別展のために発行された図録の記事には、いくつかの問題点があり、私たち「保存の会」にかかる事もあるので、調査研究を県博の方々とも前向きに進めていく観点から以下指摘させていただきたいと思います。

(1) 地下壕勤務者への聞き取り調査の方法の問題

図録の中に日吉の地下壕内で軍務についていた方々へのインタビュー記事が載せられています。ひとつは連合艦隊司令部元暗号兵の栗原啓二さん、もうひとつは海軍航空本部元理事生の中川雪子さん、福井寿美子さんへのインタビュー記事です。いずれも私たち「保存の会」としてお話をうかがった聞き取り調査です。私自身が聞き取りの進行役を務め、録音の書き起こしの外注とその補正、文書化を担当しました。栗原さんへの聞き取りは、2013年5月13日に行い会報115号、116号に掲載しました。中川さん、福井さんの聞き取りは、2013年11月30日に行い次号に掲載予定です。この聞き取りの場に県博の関係者の方もオブザーバーとして同席し、録音、写真撮影もしていました。しかし、図録の記事では私たちが行ったこれらの聞き取り調査と、そのあとに県博の方が行った「取材」とが区別なく混ぜ合わされてしまっています。これは聞き取り調査のあり方としてありえないことです。



言うまでもなく聞き取り調査は、だれが、いつ、どこで、どういう状況で、だれに対して、何を、どう聞いたのか、それに対して相手はどう答えたのかということが、つねに問題になります。聞き手と状況がかわっても当人の言うことは常に同じなどということはありえないことです。また、AさんがBさんに対して、Cという現実について聞くわけですから、Bさんの言った言葉はCという現実そのものではありません。Bさんに反映したCを言葉に表現したものです。そして、Bさんの言ったことをAさんは自分の頭の中に反映し、それを文字に書き表したもののが聞き取り調査の記録です。文字にするときには、音声の単なる書きおこしでは記録文書になりません。実際やってみればすぐわかります。話し言葉は、そのままで文書なりません。

そればかりではありません。同じBさんの言葉をAさんが聞くのと、Dさんが聞くのとでは、その反映がまた違ってきます。聞き手の問題意識や前提的な知識の有無も大きく影響します。こういう聞き取り調査の方法論を考えれば、相手が同じ人であっても、別の人気が別の時に別の場所で行った聞き取りを混ぜ合わせてしまうなど、私にはとても考えられません。私は栗原さんに対してはこれ以前にも3回聞き取りをしていますが、これらはそれぞれ、全く別個の聞き取りとして考えていますし、記録してもはつきり区別しています。中川さん、福井さんへの聞き取りも、この時がはじめてではありません。それを同じ相手の言っていることだからといって混ぜ合わせてしまったら資料的な価値を大きくそこねてしまいます。学術研究を旨とする歴史博物館としての見識を疑ってしまいます。

(2) 「インタビュー記事」の内容の問題

次に「インタビュー記事」の内容上の問題ですが、私が栗原さんへの聞き取りの進行役として、その会場にいたみなさんのために補足説明として言ったことを、栗原さんの発言にしてしまっていることには驚いてしました。

「栗原：モールス符号で『突撃』の『ト』は『トト・ツー・トト』で、それを立て続けに鳴らすと『ト連送』っていって『突撃しろ』とか『突撃するぞ』とかいう意味になるわけですね。一番最後には『ツー』っていう音を出しつ放しにして、それが途切れたとき、突撃したことですね。」（図録P 62～63）

この部分は栗原さんが言ったのではなく、私（山田）が言った言葉です。これに対して栗原さんは「はい、そうですね。」と答えていたわけです。しかしこれは、栗原さんは否定しなかったというだけです。栗原さんは元暗号兵ですから、電信兵とちがってモールス符号を自分の耳で聞いていたわけではありません。ですから栗原さんは地下壕内の体験として語っているのではなく、通信兵としての一般的な知識で「そうですね」と言っているわけです。しかし私の言ったこと（私の知識）がまちがっていたとしたら、それを体験者の話としてしまうことは、誤った知識を広めることになってしまいます。

聞き取り調査で大切なことは、体験者が何を語ったかです。それが正しいかどうかではありません。たとえ事実誤認があったとしても体験談として語られたことを聞き手が訂正することは許されません。まして本人が語っていないことを語ったことにしてしまうなどというのは聞き取り調査でも何でもありません。聞き手と語り手がすりかわつてしまったら、それはこしらえ事になってしまいます。聞き手としての私が語り手を誘導してしまわないように、私はいつも気を付けています。

(3) 「取材」という言い方の問題

また記事では「日吉台地下壕保存の会による取材」と書いてあります。しかし、私たちは会報の記事をかくための「取材」をしていたわけではありません。日吉台地下壕にかかる調査研究活動として聞き取りをしたのです。会報の記事は、聞き取り調査結果の「まとめ」をつくった上でそれを要約して記事にしています。調査研究活動と、その公表とは次元が違うことです。学術研究を志す立場の県博の出版物に「取材」という表現が使われているのは、違和感を感じます。「読者受け」をねらうかのような立場は、見世物小屋ではない歴史博物館の立場とは異なると思うわけです。

(4) 私たちの了解なく掲載されたことの問題

ところで私たち「保存の会」としては、この「インタビュー記事」について県博から何の相談も受けておらず、その掲載について、了解もしていません。他団体の調査研究活動を無断で借用し、なおかつ、つくりかえて公にしてしまうのは、非常識だと思います。あえて抗議はいたしませんが、こういうことがあると、他の諸団体との信頼関係も損ねてしまい協力を得られなくなってしまうのではないかと危惧します。歴史博物館の学術研究機関としての立場を自ら損ねるようなことは避けるべきではないかと思います。

さらに言えば、私の名前や顔の写った写真を私に断りなくこのような公の出版物に掲載しているのも、ルール違反と言わざるをえません。

(5) 今後も相互協力で調査研究を

とはいって、今回の特別展は歴史博物館職員の方々のご努力で新たな資料の発見もなされ、私自身大いに学ぶところがありました。第3010設営隊の「行動記録」の発掘もそのひとつです。お互いに調査研究を深め合う立場で、今後とも情報交換、相互協力していけたら何よりと思います。

なお、図録P 82記載の「Z 8工法を用いた覆土」の記事については、会報118号「地下壕設備アレコレ その13」で、これとはいさか異なる見解を記してあります。今後の研究課題の一つと思います。いずれにしても図解したり、想像図を描くと、それが推測でかかれているのに、事実そのもののようにうけとられてしまうことがよくあります。事実確認ができないものは、私たちの会報でもそうしていますが、「想像図」と必ず付記することも必要だろうと思います。

付1) 聞き取り調査方法については、『しらべる戦争遺跡の事典』
(十菱駿武、菊池実編 柏書房刊) I部5節「聞き取り調査の方法
—戦争体験を記録する方法」が参考になります。

付2) 図解P 32の「長官旗」と書かれているのは「大将旗」あるいは「将旗」とする方が適切だろうと思います。私の知る限り、連合艦隊あるいは各艦隊の司令長官座乗艦は大将旗あるいは中将旗をマストに掲揚して示していました。日吉に連合艦隊司令部を移した時の電文にも「将旗ヲ第一作戦司令所ニ移掲ス」とあります。

報告**県立歴史博物館の特別展と見学会**

運営委員 石橋星志

神奈川県立歴史博物館の特別展「陸にあがった海軍」の関連行事として、3月1日、7日の午前10時30分と午後2時にそれぞれ30名の定員で現地見学会が行われました。3月1日は慶應義塾大学考古学研究会が、7日は保存の会がガイドを担当しました。博物館の方によると、希望者はメールと郵便で合わせて1500人にのぼり、過去最大の倍率だったそうです。日吉の駅から来往舎まで、博物館の方が案内の札を手に持って立たれ、来往舎のロビーが待ち合わせ場所でした。各回見学時間は2時間ということで、保存の会は地下壕のみを基本に、参加者の希望によって寄宿舎までをオプションで案内する形でガイドしました。

考古学研究会のガイドは、説明にあまり多くの時間をかけずに行われました。特別展に出品された資料のパネルなども持参していましたが、残念ながら、聞き手をあまり意識しておらず、聞き手に間違った印象を与えるような説明もありました。参加者は親子が多く、子どもは小学生、親も40代くらいと見受けられ、保存の会の見学会とは違う雰囲気も感じました。保存の会のガイドでは、2回とも多くの方が寄宿舎までの案内を希望され、見学された方の関心の高さを感じました。こちらは子どもの参加は多くありませんでしたが、やはり通常の見学会より年齢層が若かった印象で、30~50代の社会人の方が多かったです。関連行事は、他に2月7日の日吉キャンパスでの記念シンポジウム、2月21日の水中写真家を講師にした、博物館での記念講演会、2月1日、14日、28日、3月22日の学芸員による展示解説がありました。

特別展の展示解説には、私の参加した回では、60名超の方が参加し、最中には移動が困難になるほどでした。特別展では、レーザー測量も踏まえた地下壕全体の長さなどの研究成果や、新たな資料の存在など見所が多くありました。慶應義塾福沢研究センターから出品



神奈川県立歴史博物館

された、海軍と慶應義塾の施設提供の話し合いのメモには、海軍の資材置き場や倉庫を置きたい希望や、倉庫はのちのちは慶應に提供できることなど、具体的な提案や交渉の様子がリアルに読み取れ、機密保持の観点からか、海軍が使用する部分と学生が使用する部分に仕切りを設けることなども書かれています。厚生労働省に保管されている、3010設営隊の活動記録もこれまで知られていなかったもので、同じ綴りに援護業務で使う資料もあり、厚生労働省が持っているとのことでした。

他にもまだ資料がある可能性が分かったことは事実解明の希望であり、会としても研究を深めて、見学会に反映させたいとの思いを強くしました。特別展の来場者は、幅広い世代で、学生から戦争体験世代まで幅広く、ボランティアガイドの方に聞いたところ、来館人数は他の特別展と比べて出足から段違いに多く、年齢層も幅広いとのことでした。

最終的に、今回の特別展だけで博物館1年分の来館者を集めたと聞き、今年が敗戦から70年ということや、大規模にポスター等が県内各地に張り出されたこと、県の施設が展示するという信用などいくつかの要素はあると思いますが、地下壕への関心の高さや文化財としての意義の周知が、ある程度進んでもいるのではないかと感じました。

特別展で、保存の会を初めて知った方や、今回の現地見学会の抽選に外れた方など、今後も影響で見学会は忙しくなりそうですが、ともかくこういう時勢に成功を収めたことは喜べることだと思います。

報告

史上初！ 元電信兵、暗号兵の5人が集まった見学会

運営委員 石橋 星志

2月28日（土）の定例見学会では、日吉の地下壕に勤務されていた電信兵と暗号兵だった5人が参加されました。元電信兵の保坂初雄さんと大島久直さん、元暗号兵の滝口肇さん、平田一郎さん、栗原啓二さんです。

栗原さんには以前から、何度か証言をいただいていましたが、これだけの方が一堂に会したのは、保存の会史上初めてのことではないかと思います。見学会の中でも、電信・暗号室で証言をしていただき、当日の参加者のみなさんと保存の会のメンバーも聞き入りました。見学会後には



左から：平田一郎さん、大島久直さん、栗原啓二さん
滝口肇さん、保坂初雄さん

来往舎のファカルティーラウンジに移動し、聞き取り調査を行いました。その際に、慶應義塾福沢研究センターの都倉准教授、石田幸生研究員も共同で行いました。

みなさん80代半ばから90歳というにお元気そのもの。教育を受けた時期や勤務した時期はばらばらで、お互いの面識はないということでしたが、昔の記憶はしっかりとしており、寝泊りに使った



第一校舎の教室の様子、どの受信機に就くかはその時ごとに違うこと、初年兵教育などいろいろなお話をいただきました。

私が話を多く聞いた元電信兵の保坂初雄さんは、娘さんや息子さんと山梨から来られ、県立歴史博物館の特別展見学とセットでの地下壕見学は90歳のお祝いの旅行とのこと。娘さんが作成された自分史年表や多くの資料も持参して見せていただきました。高等小学校を卒業後、横須賀の海軍工廠に勤務、徴兵で陸軍に入るの嫌だと、海軍を志願し、電信兵としての教育を受け、連合艦隊に配属され日吉勤務に。着任後、「はんこがないから誰か彫れないか」と言われ、公印や個人印（決裁印などに使用したものか）を作ったそうです。また、気象関係の情報を受信する担当で、他の電信兵とは勤務が違っており、その情報から天気図を作り、担当者に見せてもらうこともあったこと、こっそり米軍の謀略放送を聞いたことなども教えていただきました。

今後、録音データを文字に起こすなどして、資料としても活用させていただくほか、見学会のガイド内容の検証にも活用させていただこうと思っています。

資料 日吉連合艦隊司令部・元暗号兵 平田一郎さん

聞き取りメモ

終戦で友と肩を抱き合い喜んだ

【2014年12月28日 山田譲 山田淑子 聞き取り】

(1) 軍歴

平田一郎さんは昭和5年10月5日生で現在84才。当時は目黒区西小山に住んでいて、目黒区立高等小学校在学中に志願した。昭和20年1月25日14才で横須賀海軍通信学校に入隊。1ヶ月位で、横須賀通信学校豊川分校に移動し4ヶ月間、暗号教育を受けた。豊川に行く列車で、特攻兵の集団といっしょになったが、みんな酒を飲んでさわいでいて驚いた。上官が特攻兵だと言っていた。

その後日吉に来て8月末までいた。通信学校では1等水兵。まわりの宣伝にのせられて志願した。父母とも何も言わなかった。



平田一郎さん

(2) 勤務状況

交代勤務だったが何交代か何班編成だったかおぼえていない。夜も勤務していた。ただ言われるままにやっていた。

呂暗号を使っていた。通信学校では伊、波、仁暗号も習った。リサ甲という陸軍暗号も使った。軍機とかの機密等級があった。解いた後、班長（上等兵曹）が「誤字検」といってチェックした。文意がとおらないものを直した。乱数表のどこを見るのかが違って送られてきたりして翻訳できないものもあった。読めない所は「？」の印をつけた。まるで読めないものもあった。G Fは連合艦隊とかG Bは海軍総隊、Bは戦艦、G Sは砲艦といった符号表があった。電文でおぼえているのは「広島に新型爆弾が落とされた。被害甚大」というもので、自分が解いた。

(3) 日吉での生活

地下壕出入口先のカマボコ兵舎で寝泊まりし食事もそこで食べた。地下壕内の2段ベッドで寝たこともある。暗号室はコンクリートの打ちっぱなしで蛍光灯がついていた。暗号室とカマボコ兵舎を行き来していただけで他の所には全くいかなかった。一度、司令長官の背中を流しに行った。地下階段でなく外から丘の上に上がって行った。班長に言われて、行き方を教えられて一人で行った。宮城遥拝は記念日の時だけで、普段はしなかった。

食事はよくなかった。足りなかつたと思う。七分づきかなにかで、野菜、豚肉も時たま出した。当番の兵が食事をカマボコ兵舎に運んでそこで食べた。給料は豊川分校のおわりと復員の時にもらっただけだった。休日は日吉では1回だけ。西小山の実家に行ったら空襲で焼け野原だった。質屋の倉だけ残っていた。実家は建物疎開でこわされて、父親は下十条（今の東十条）に引っ越していた。父は日本電気の職人だった。姉と一緒に住んでいて、姉は富士航空計器（後のキャノン）に勤めていた。母は弟と岩手の水沢の実家に行っていた。

制裁は通信学校ではやられた。精神注入棒で3発なぐられ、飛ばされた。しかし、日吉では体罰は1回程度でひどい扱いはなかった。下士官に呼ばれて殴られると思ったら羊かんをくれた。甘くておいしかった。豊川では空襲にあったが日吉ではおぼえていない。

終戦の時は、これで帰れるとうれしくて友と肩を抱き合って喜んだ。別におこられもしなかつた。上の人も喜んでいたのではないか。その後、暗号文や暗号書を8月中燃やし続けていた。女子挺身隊（航空本部などの理事生とおもわれる）の人も書類の焼却を手伝っていた。玉音放送の時は松林の中でアブラゼミの蝉しぐれだったが、それがヒグラシの鳴き声にかわっていた。

(4) 戦後の生活と今思うこと

復員後は「復学しないか」と先生に言われたがそれどころではなかった。買い出しで大変。木工所に勤めた。その後、自分で商売をはじめた。もうからない仕事をしていた。カメラ屋をその後やって暮らしてきた。

あんなバカな戦争やるもんじやない。二度とやりたくない。軍人勅諭はおぼえたが、歌みたいなもので、意味も分からずただおぼえていた。

手記

“日吉と私”

【2015年1月28日 平田一郎】

【東急の駅で勤労動員】

私は幼いころから東急沿線に住んでいたので、東京急行との関わりも多く、日吉周辺にも沢山の思い出が残っています。小学校高等科在学半ばに学徒動員がかかりました。そして東京急行電鉄の駅務につくことが決まり、渋谷道玄坂の劇場で行われた学徒出陣式で、私は壇上に立ち決意文を読みあげたことがあります。その後、「大岡山」や「荏原町」の駅などで、改札業務や満員通勤電車客の尻押しなど、私たちなりに頑張っていたのです。

当時の東横線「日吉」駅は粗末な木造駅舎で、ヒノキの角材を組み合わせて作った改札口を出ると、道路を隔て



日吉キャンパス俯瞰図（1937年頃）
(提供：慶應義塾福澤研究センター)

て慶応の丘があり、丘の周辺一帯には水田が一面に広がっていました。今ではそんな面影すら残っていませんが、イナゴやザリガニとりで遊んだ、子供時代を懐かしく思い出すのです。

【海軍通信学校に志願入校】

昭和20年は雪の多い年でした。志願して合格し、横須賀海軍通信学校へ入校した1月25日も寒い朝でした。久里浜駅から平作川沿いの砂利道を、サクサクと進んでいったみんなの足音が、今でも耳に残っています。そして1か月余の厳しい新兵教育が始まりました。雪の中での匍匐（ほふく）前進、射撃訓練、カッター訓練、合間を見ての食事中に襲いかかって来たグラマンの銃撃を逃れ、丘の防空壕へ逃げ走ったこともしばしばありました。

3月中旬、愛知県豊川の分校に移動、暗号術の習得に向けて日夜を分かたぬ勉強が続きます。なんの知識もなかった暗号術を、4か月の間に習得するのも難しいのに、モールス記号や手旗信号まで覚えなければなりません。だから当然時間外の予習・復習が必要です。夜中の眠い時間に起きだして廁（かわや・トイレ）の常夜灯も利用しました。薄暗い灯りの下で教習書を開き、不眠で自習をしたことが何度もありました。教官たちはこれを知つて知らないふりをしていたようです。だから寝不足で教科時間に居眠りする練習生が続出しても無理なのですが、見つかると全員罰直になって「軍人精神注入棒」と書いたバッターと呼ばれる丸棒で、尻を叩かれるのです。

【日吉の連合艦隊司令部に暗号兵として配属】

この時の練習生を「第10期普通科暗号術練習生（10期普暗練）」と呼び、入校したのが1200人、その後淘汰されて、豊川分校から無事教程を終えて現地部隊に配乗（赴任）できたのは、約半分の600人余だったと聞いています。更にその中から選り抜かれた18名は、艦を失つて日吉の地下壕に潜っていた聯合艦隊司令部の暗号兵として配乗（赴任）になりました。昭和20年6月のことでした。「あそこにや食い物もたくさんあるし、綺麗なオナゴ（動員女子学徒）もたくさんいるぞ！」先輩にあおられて、勇んで赴任してきたのに、いるのはノミとシラミと毎夜のように訪れるB29爆撃機ばかり……

食い盛りの少年兵は、腹が減つてたまらなくって、食えないのが分かっているくせにドングリの実をかじったり、かまぼこ兵舎の側溝に沢山いたザリガニを、衛兵の目を盗んでゆでて食べたら、これがすごくうまい。でも、これが上官に知られたら、猛烈な体罰を受けなければならないことを、知つていながらも食いたかった、食い盛りの腹だったのです。

私達の勤務は、一日約6時間ほど、4交代24時間勤務でしたが次々に受信される暗号電文が、机上に積まれていても、解読不能の電文や意味不明の電文が多く、経験の浅い私達少年兵には解読できず、豊富な知識を持つ上官に恐る恐る依頼することもしばしばでした。

8月のはじめ、新型爆弾による被爆の情報が相次いで入り、日本軍の旗色の悪さを感じながら暗号解読を続けていた日吉の地下壕生活です。

昭和20年8月15日、カマボコ型兵舎裏の松林への集合命令が出て、不動の姿勢で玉音放送を聞きました。通信部隊のくせにラジオの感度が悪く、松林で啼くアブラゼミの大合唱に押されて、内容が良く理解できません。兵舎に帰つてから班長から「日本は敗けた！」と聞かされて「しめた！帰れる」と、僚友と肩を抱き合つて喜んだのだから、日本の銃後の皆様には申し訳ないことなのですが、その時の少年兵たちの本音だったでしょう。

その数日後から、ジリジリと照る太陽のもとで、赤い表紙の暗号書や電文の焼却作業が始まりました。地下壕から持ち出した関係書類は膨大なもので、簡単に焼き尽くすことはできません。でも乗り込んでくる米軍が何を言い出すかわからない怖さで、夢中になって燃しました。苦労してやっと習得した暗号術、夜中に起きだして廁で勉強した大事な暗号書。今それを引きちぎり、破つて燃してしまうのがとても辛くて悲しくて、強い脱落感に苛まれながら、焼却作業を続けました。

【待望の復員命令】

少年兵たちは志願兵だけど、故郷の父母兄弟に思いをはせ、望郷の念にかられて復員命令が出るのを心待ちにする毎日だったのです。8月も終わりに近いころ、待望の帰郷命令が出来ました。あの日にうるさいほど啼いていたアブラゼミは声を潜め、夏の終わりを告げるヒグラシの鳴き声に送られて、思い出多い日吉の丘を足早に下りました。戦争に疲れてた日吉駅の木造階段はギシギシ鳴って危険なものでしたが、そんなことは気にもせず、帰郷の喜びに胸弾ませて故郷に向かいます。カーキ色の海軍第3種軍装に、ぼろリュック、当時の少年たちが憧れたセーラー服も汚れたままで入っています。そして米と塩も少しづつ……

今、日吉駅の周辺は、商店が密集していてコンビニや回転ずし、さらにパチンコ屋まであり、繁華街の雰囲気が充満しています。駅も大変貌をとげてホームは地下に潜ってしまいました。ここが「大日本帝国海軍聯合艦隊司令部」のあった町であることを、知っている人もめっきり減ってしまいました。あの時14歳だった私も80代も半ばになりました。「少なくなった人たちの力もあわせて、日吉地下壕の記録は大切にしたいものだな！」と、思いながら地下日吉駅のホームに滑り込んできた、スマートな車体の東京急行電鉄の電車に乗って私は家路につきました。

追伸

地下壕の中について書きたかったのですが、新兵には壕内を歩き回るような余裕はありません、その知識も乏しいものでしかありません。こんな情けない兵隊もいたことと、どんないききつで暗号兵になったのかを読み取っていただければ幸いです。推敲が充分でなく読みづらいかと思いますが、原稿の取捨選択は編集者にお任せします。2月の見学会には、ぜひ参加したいと思っています。 平田 (2015年1月28日)

報告**地下壕入口、新たに2つ破壊の可能性 崖地開発の計画明らかに
運営委員 石橋星志**

一昨年、慶應義塾所有地に隣接した民有地で、宅地造成のために航空本部等地下壕の出入り口の1つの「7A」および沈殿槽と思われる構造物が破壊されてしまったことは、以前の会報でお伝えしました。その後、造成工事は完成し、7A以外の出入り口については、とりあえず破壊を免れていましたが、この度新たに42戸のワンルームマンション開発計画が持ち上がったことが明らかになりました。

4月4日に周辺住民対象の説明会があり、現在あるマンションに隣接する形で建設が計画されており、工事が行われれば「5A」および「6A」が破壊される可能性が高いことが分かりました。さらに、6Aの上部にある平安時代の横穴墓についても同時に破壊されます。

一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されているため、事前の調査が必要になります。しかし、調査・記録を実施すれば、入口を破壊する工事ができます。戦争遺跡の文化財指定前に、これ以上破壊されることを防いでいかなければなりません。まだ開発申請は出されていないようですが、今後も情報収集を続けながら、業者及び国や県・市に向け、保存の声を届けて行きたいと思っています。動静があれば、会報でお知らせする予定です。



新たな“開発事業のお知らせ”



6Aの上部にある平安時代の横穴墓

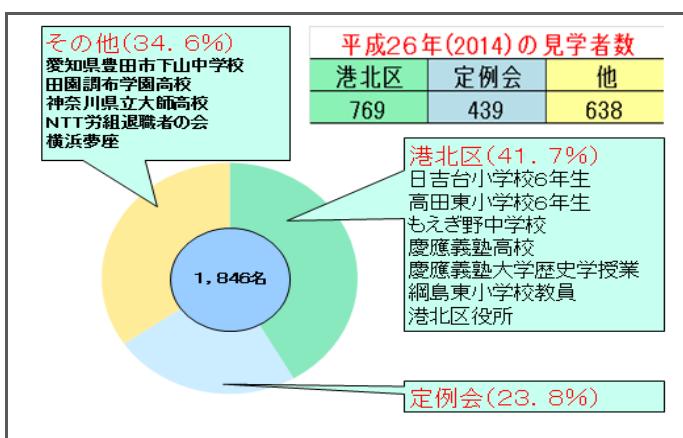
報告

平成26年度地域のチカラ応援事業「最終報告会」に参加
運営委員 佐藤宗達・小山信雄

3月21日（土）、港北区役所4階会議室にて、“地域のチカラ応援事業最終報告会”が開催されました。チャレンジコース26団体の内、11団体が発表を行う事になり、日吉台地下壕保存の会は初参加団体として発表を行いました。7名の事業推進懇話会委員と約60名の参加者・観客の皆さんに向かって、持ち時間7分間（厳しく時間厳守）の最終報告を行い、質疑応答となりました。今年度（平成26年度）の見学会については、昨年4～6月の中止期間があったにも関わらず、前年度並みの見学者対応が出来るよう運営して来ている中、平日対応可能なガイドの養成が益々重要になっている状況の説明を行いました。

また、特記事項として、昨年12月に開催した港北図書館での“パネル展&講演会”で港北区を中心とした多くの方々の関心を得られた事、及び今年の1/31～3/22に神奈川県立歴史博物館にて特別展「陸にあがった海軍」として日吉台地下壕が取り上げられ、大盛況を博したことを報告しました。

今年は「戦後70年」という節目の年でもあり、戦争遺跡への関心が広がっている中、ガイドの人数を増やし見学会の回数、見学者を増やすと同時に、ガイドの全体的質の向上を図って、日吉台地下壕を多くの人に知ってもらうよう努力し、平和学習のために地道に活動を継続してゆきます。



2014年の見学者数（地区別）



横浜市港北区役所4階会議室

連載

日吉第一校舎ノート (8) 列柱のクラシシズム (その1)

運営委員 阿久沢 武史

ヨーロッパ建築における「古典」とは、言うまでもなく古代ギリシアと古代ローマである。古代ギリシアでは均整のとれた建築美が追求され、それは規則正しく配列された円柱を持つ神殿の形象に最も特徴的に表れている。古代ギリシア建築の基本は、円柱とその上部構造を作る構成の形式であり、これをオーダーと呼ぶ。オーダーは、下から基盤・円柱・エンタブラチュア（円柱上部の水平な帯状部分）・三角破風のペディメントから成り、ドリス式・イオニア式・コリント式に大別される。こうしたオーダーと、建築物全体の論理的な（数学的な）比例関係（プロポーション）から生まれる建築美は、古代ローマに受け継がれ、ヨーロッパの伝統的な様式として継承されていくことになる。それが大きく花開いたのは17～18世紀のフランスにおける「古典主義」である。王政が絶対的な権力を強めるのに伴い、王宮や王室の壮麗な建築物、貴族の邸宅、教会などに、古代ギリシアを規範とする様式が取り入れられた。パリのルーヴル宮が、その代表である。その芸術的伝統を継承する拠点が、中村順平が学んだフランスのエコール・デ・ボザールであった。



第一校舎

古典主義的な建築は、やがて近代市民社会が進展するにつれて、王宮や教会から市庁舎・博物館・図書館・病院などの公共建築に拡大していく。同じ17～18世紀にイタリアで隆盛を迎えたバロック建築が、教会による前近代的な人間の支配とつながり、過剰な装飾表現になりすぎたことから、シンプルな造形原理に回帰しようとする動きが生まれることになった。18～19世紀の「新古典主義」がそれである。それは民主的な社会制度と合理的な造形原理を生み出した古代ギリシアを「西洋文明の輝かしい原型」と考えて模範にしようとする思潮である（西田雅嗣『ヨーロッパ建築史』昭和堂）。

この「グリーク・リバイバル」は、ドイツではブランデルブルグ門やベルリン旧博物館（アルテス・ムゼウム）などのような国家的事業の象徴としての威風堂々たる建造物を生み出し、アメリカでは民主主義の精神の象徴として建国期の国家的な建築物に強い影響を与えていくことになる。その代表がホワイトハウスであり、国会議事堂であり、リンカーン記念館である。

特にアメリカでは、フランスのエコール・デ・ボザールで学んだ建築家によるアメリカンボザールが主流となり、二十世紀初頭にかけてニューヨークを中心に数多く建てられていく。コロンビア大学やニューヨーク大学などの大学図書館、ニューヨーク公共図書館、グランドセントラル駅など枚挙にいとまがなく、古典主義は国家的なモニュメントから公共の建築物に広がりを見せていったのである。日本におけるアメリカンボザールの嚆矢は、ニューヨーク大学図書館を手本にしたと言われる野口孫一設計による明治37年（1904）の大坂図書館である。その後、大正末から昭和初期にかけて、東京を中心に大阪・横浜・神戸などで次々にアメリカンボザール流の建築物が建てられていった。そうした中で、特に古代ギリシアの列柱の様式を前面に出して表現したものとして、長野宇平治による大正5年（1916）の三井銀

行神戸支店があげられる。その特徴について、藤森照信は次のように評している（『日本の近代建築（下）』岩波書店）。

小さな建物だけれど、前に立つと、それまでの日本の歴史主義建築にはなかった内側から盛り上がってくるような迫真力にうたれる。ポイントは列柱で、御影石から切り出された長さ十一メートルの一本の柱が六本、リズミカルに展開し、背後の引き退った壁面の影をバックにして、日射しの中にあるギリシアの白い遺跡のように浮き立つ。一步近づけば柱のエンタシスの曲線は曲面となってふくらみ、二歩近づけばふくらみながらも先の方はすぼまり、すぼまつた先にイオニア式の柱頭飾りの二つの渦巻きが載る。硬い石でありながら、何か生き物のような躍動感を持つ柱。ギリシア神殿に始点を持つ古典系様式の肝所を柱とするなら、日本の古典主義は長野宇平治のこのイオニア式の柱を得て、一つの境地に達したといえよう。

長野はその後、日本銀行岡山支店・横浜正金銀行下関支店をはじめとする銀行建築を次々に手掛け、昭和7年（1932）の大倉精神文化研究所（現・大倉山記念館）に至る。長野以降、日本の銀行建築は石の列柱を前面に押し出した様式が主流となり、「大正・昭和戦前の銀行建築をリードしたのは石の列柱のクラシズム」であり、その列柱において特徴的なのは、ドリス式のオーダーであった。ドリス式は、ギリシアの三大オーダーのうちで最初に生まれたものであり、礎石がなく、「ズングリした柱身が床面から掘立柱のように直接立ち上がり、上に来るキャピタルもつぶれた饅頭のような形をしていて、全体の印象は古拙—アルカイック」である（『日本の近代建築（下）』）。すなわち、日本における古典主義は、本家であるヨーロッパやアメリカ以上に古代ギリシアの古層に深く回帰していく傾向が強く見られたのである。

日吉第一校舎は、ただ「そのもの」として単独に存在しているのではない。そこには設計者網戸武夫の思想があり、彼を育んだ教育があり、彼が属した設計集団の気風があり、その時代の世界規模の、そして日本という古い文化的伝統をもつ後発の近代国家における、「建築」をめぐるダイナミズムがあった。古典主義とモダニズムとのせめぎあいと融合である。何より関東大震災という未曾有の災害を経験し、安全性という視点から建築に求められる条件も大きく転換していた。こうした一つ一つの要素を丁寧に読み解かなければ、第一校舎という歴史的な建築物の個性に迫ることはできないだろう。当時の日本では、銀行建築を中心に「石の列柱のクラシズム」がひとつのピークを迎えようとしていた。鉄筋コンクリート打放し仕上げの施工がほとんどない時代に、コンクリートの素材そのままの列柱はまた、當時としてはめずらしいものであった。



第一校舎

報告**第9期ガイド養成講座中間報告**

運営委員 喜田美登里

受講者4名で始まった第9期のガイド養成講座は、途中から4名の受講希望者が加わり、受講者8名と運営委員・ボランティアガイド15名程で学習を進めています。講座での資料等は会報に掲載して行く予定です。第5回目の5月9日には「体験者のお話」「地域の人へのガイドの実際」「フリーディスカッション」を行います。

第2回 2月28日 「日吉で海軍が使った地上施設の話（第一校舎の建設など）」

第3回 3月14日 「ガイド活動の実際」見学会の運営・手続き・心得など
・「ガイドポイントごとの説明」・「説明の出所、出典」

第4回 4月11日 フィールドワーク 午前 理工坂付近人事局地下壕入口 午後 司令部
地下壕航空本部への通路、発電機室、消音器室、南側出入り口等



左：司令部地下壕
から航空本部への
通路 水没し、土
嚢で塞がれている
部分

右：理工坂付近
人事局地下壕入口

第2回「日吉で海軍が使った地上施設の話」を聴いて 運営委員 上野美代子

1月17日から始まったガイド養成講座も、第2回と第3回を無事終了しました。

第2回目（2月28日）から、新しいメンバーが加わり、そして第3回目（3月14日）からまた新たに1名加わり、仲間が増えてとても心強い思いです。

第2回目の講座は、軍令部第三部（情報部）が入っていた第一校舎（現慶應高校）の、歴史と建物の講義です。第一校舎を建てたときの学校側の思い、そして設計者の思い、会報にも書かれていたことですが、勉強不足の筆者はその一つ一つのお話がとても強く感動的でした。1934年理想的な学園を作り、その中で育っていく学生の未来を想像していたのに、戦争で学生がいなくなり、そこへ軍隊が入り、戦後米軍が入り、そして戦後4年後に、やっと学生のもとに還される。今慶應高校として学生の声が響く校舎。なんだか第一校舎が、たくましくそして、いとおしく感じました。また、寄宿舎の南寮がリニューアルされる前に見学に行かれた方からの報告がありました。戦争中に寮を去らなくてはならなかつた学生の落書きや寮内部の様子（トイレ跡、床暖房パイプ跡など）。またローマ風呂の無残な姿など。第3回目は、実際にガイドを行うためのポイントなどが話されました。



慶應義塾大学 来往舎 中会議室

お知らせ

平和のための戦争展 in よこはま

5月29日（金）10時～5月31日（日）18時

横浜駅西口かながわ県民サポートセンター

講演 5月30日 13時30分～15時30分

「いのち・環境・地球を大切にする平和な未来を」 小山内美江子さん（脚本家）

「美ら海・沖縄から横浜へ」 山里盛智さん（琉球新報元記者）

5月31日 13時30分～16時

「若者たちへ 100歳ジャーナリストからのメッセージ」 むのたけじ さん

その他 展示・報告・朗読劇があります。入場無料 講演会は資料代500円

問合せ 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会 Tel 045-241-0005

★日吉台地下壕の展示もあります

お知らせ

第19回戦争遺跡保存全国シンポジウムが開催されます

（詳細は会報121号）

- ・日時：9月5日（土）、6日（日）、7日（月）フィールドワーク
- ・会場：南総文化ホール、館山市コミュニティーセンター（千葉県館山市）
- ・主催：戦争遺跡保存全国ネットワーク

訃報

連合艦隊司令部壕に関わってこられた、足立 寛さんが今年3月にお亡くなりになりました。14年前に慶應のマムシ谷入り口が整備されるまでの10年以上、足立家の庭にある入り口から地下壕を見学させていただきました。不見識な報道や不作法な見学者も多く、またお身内を空襲で亡くされたというつらい経験にもかかわらず、常に保存の会の活動に好意的で、協力的でした。戦争は2度としてはならない、という強い気持ちを持っておられたからでしょう。心よりの感謝とお悔やみを申しあげます。



★活動の記録 2015年2月～4月

- 2/24 地下壕見学会 慶應高校 29名
- 2/26 地下壕見学会 かながわ健生クラブ 34名
会報119号発送(慶應高校126番教室)
- 2/28 ガイド養成講座②(来往舎中会議室) 定例見学会 49名
- 3/2 地下壕見学会 田園調布学園 高校生・保護者・先生他 74名
- 3/7 地下壕見学会 神奈川県立歴史博物館企画展関連事業 70名(午前午後)
- 3/9 地下壕見学会 コンフォール南日吉自治会 27名
- 3/10 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民ホールセンター)
- 3/12 運営委員会(来往舎205号室)
- 3/14 ガイド養成講座③(来往舎中会議室)
- 3/17 地下壕見学会 宮城県多賀城市市議会議員 6名
- 3/21 平成26年度地域のチカラ最終報告会
- 3/25 地下壕見学会 全労済 38名
- 3/26 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民ホールセンター)
- 3/28 定例見学会 47名
- 3/30 地下壕見学会 慶應高校 6名
- 4/9 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民ホールセンター)
- 4/11 ガイド養成講座④ フィールドワーク(人事局地下壕入口・連合艦隊司令部地下壕周辺)
- 4/16 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民ホールセンター)
- 4/17 地下壕見学会 18元気会 35名
- 4/22 地下壕見学会 富士見会 24名 慶應高校生徒会 8名
- 4/24 地下壕見学会 イマジカクラブ 36名
- 4/25 定例見学会 60名・平成27年度地域のチカラ公開提案会
- <予定>
- 4/30 会報120号発送(慶應高校126番教室)
- 5/14 運営委員会(来往舎205号室)



高校グラウンドから見た第一校舎

☆定例地下壕見学会

毎月第4土曜日 13時～15時30分(原則)

(5月30日(土)・6月27日(土)・7月25日(土))

は申込み多数のため締切りました)

夏休み見学会 8月1日(土)9時30分～、13時30分～(午前・午後)

8月3日(月)9時30分～・8月5日(水)9時30分～

定例見学会 9月26日(土)13時～・10月24日(土)13時～



地下壕内の新しいランタンです

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで **045-562-0443** (喜田 午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会